

テキストの自己コメンタール¹⁾

— クラリッセ・テーマからの R. ムジール

『特性のない男』の解説—

米 沢 充

1) R. ムジールの小説『特性のない男』は、その未完であること、テーマの拡散、作品意図のその時々の変更、そして不斉合と作者の韜晦のため、一貫性を見出し難い、甚々読み辛い作品として存在しているが、その拡散性、散乱性のほうこそをむしろ積極的にとらえ、そこに現われてみえる一つの文学空間を中心に据えて、その特徴をテキスト性、言語性の方から解釈しようという研究動向が近年のムジール研究の成果と言えると思う²⁾。

小論の意図は次の点を示すことにある。すなわち、この作品の出発点が自伝的要素の中にあることは、作者の書き残したさまざまな日記断片や作品メモから容易に判ることであるが、ただ通常の自伝的作品のように体験的要素に肉付けして展開していった結果成り立ったことを言い、それを立証するという成立史的な意味だけでなく、むしろ、作品構造を生み出す座標軸として、文体的・テーマ的に基底部をなすもので、そこから作品の全体に（隠れた）影響が及んでいると見るべきであり、読み解きにおいて常にそこに立ち帰りまた出て行くべき点であることを意識化する必要があることを言うのである。それは、丁度意識という上部構造の下部に潜んでいる連結した無意識のようであるという比喻で言い表わせるかもしれない。さらに、無意識について「一つの言語として構造化されている」という、J. ラカンの有名になった定義にならって言えば、自伝的要素を土壌としている部分はこの作品の中で（隠された）文法構造を持っていると言うこともできるだろう。そして、更に、この自伝的部分の中心にいる人物が正気と狂気との境界領域を往き来する女性（Clarrise）であるというファクターによって、構造は一層屈折し複雑化して、作品の意味的世界に絶えずズレが書き込まれる。

このようにクラリッセ＝テーマを中心としている自伝的部分を、この通常の意味では筋立てや展開を持たぬ錯綜した作品の理解のための核となるキーとして位

置づける、極端を承知で言えば、他の全ての部分をこれに還元して、これとの関係の中から、理解の図式を構成する〔し直す〕ことが可能なのではないか。

それには『特性のない男』においては内容面や概念性よりも、テキスト性や言語性 (Sprachlichkeit) が支配的である、という考えに立てるか否かがかかわってくる。

このような解釈方式を提出することは、この小説の全体性、テーマ性そして芸術性を無視する蛮行であるとして糾弾されるだろうということは予測がつく。だが、全体を Satire として捉えるにしる、神秘的体験の現出 (=anderer Zustand) への希求、あるいはその中での主人公ウルリヒの自己実現というパターンで捉えるにしる、直線的 (一面的) Konsequenz は喰い足らず、物足らず、かつ余りにも多くのものを捨象して辛うじて得られる「全体性」ではないかという疑いが常に出てくる。『特性のない男』の長年にわたる生成史の中で徐々に育っていった物語の核、中心は、①神話的思考を背景とした上での兄妹愛、②才能と挫折の若き日の延長線にある男女 (ウルリヒ・ヴァルター・クラリッセ) の一種の三角関係、③殺人者脱走幫助の反社会性、④神秘主義的領域への接近という、いずれも時代状況、個人的あるいは社会的な精神状況への否定を言おうとする姿勢を含むものだった。それらはそれぞれにスケッチされたり、組み合わせられたり、新しい局面を付け加えられたりして『特性のない男』へと発展していったわけだが、前出の如く時代風刺 (Zeitsatire) とウルリヒの自己や世界との融和 (神秘的愛, Euphorie³⁾) という 2 大テーマに向って、「小状況の文学」(マイナー文学) から発展していったと、一般には受けとめられる。そして「狂気」の領域にかかわるクラリッセやモースブルガーのテーマは下位に置かれ、克服さるべきものであるという、これは多分に作者ムジールその人の描いた枠組みが堅持される。勿論、この二人の「狂気」が先の 2 大テーマを刺激して現出せしめ、深めているという限りでの価値は誰しも言及し、ことに痴情殺人犯モースブルガーの特異な破砕された言語領域、思考世界は、『チャンドス卿』(ホーフマンスタール) のデフォルメとして知的図式化を許すので、好んでウルリヒと対比されることはあるにしても、やはり下位の、下界的周縁的存在として以上の理解は無い。ヨーロッパ的「意味中心主義」からすれば当然といえる。作者の意図に添った形で、クラリッセ=テーマは主人公ウルリヒが見捨てた「過去の」彼を代表しているものとさえ解釈される。だが、近年 Heyd や Pott は作者の意図に逆らった、表層の下の意味層、「テキストの自己コンメンタルの構造⁴⁾」からの小説の理解を提唱している。しかしこの提唱にも拘らず、彼らにしてもクラリッセ=テーマを核にもつ伝

的部分と作品全体との関係を十分解かり易くは説明していない。つまり一定の限定を置いている。だからこのテーマを中心に据えるということやはり「蛮行」ということになる。かつて、Kaiser/Willkins が自伝的部分にのみ光を当てた解し方を提出した時⁵⁾、「非学問的」とする非難が相ついだ。我々も彼らは誤っていると考える。つまり、①クラリッセ、モースブルガーという「狂気」の克服→ウルリヒとアガーテの神秘的な愛の合一の実現という、一方向でのみ生成を理解している、②象徴解釈、精神分析への安易な寄りかかり、③作品の前史である草稿やスケッチを謎ときめいた不可欠の理解前提としたこと、④作品の中の社会批判の面を忘却して、①②③の手続きを経るだけの、ウルリヒの心の問題にだけに小説を矮小化したこと、などの諸点を批判されていることは正しい。だから、このような考え方とは異なった地平で、自伝的部分におけるクラリッセ＝テーマを中心に据えようという試みは、生成の出発点であるからという事情を言うのではなく、小説の現にある形の中でこのテーマ圏が作動させている小説構成原理的な意味に着目することなのである。

2) それには『特性のない男』へのテキスト論的接近法が必要となると思われる。この辺りのことは既に論じたことがあるので⁶⁾、ここでは要点のみを言う。この小説においては言語の指示内容(＝意味されたもの)よりも、言語それ自体(＝意味作用)こそが内容をなしているという逆説的な見解は、Michel によって1954年という早い時期に提出されたが⁷⁾、その後の研究史では忘れ去られていた。この逆説的なテキストの有りようを、フランスに発した新しい言語観、テキスト理論、言語現象の精神分析学的了解などの方法によって説明しようという試みは、1980年の Heyd の論文あたりからである。Arntzen は、これらの理論に依拠することなく、独自に言語性 Sprachlichkeit をこの「読み解き難い」作品の理解のためのキーワードとするという考えに到った。彼は簡潔に、この小説では「意識は言語と同一視しうるもの (identisch) である。」⁸⁾と表現している。それによって、この小説が一目そのように見えるような歴史的＝観念的構築物ではなく、言語性として現われる「現存 Dasein の具体性」を描くものであることに注意を向ける。この Arntzen のテーゼを受けて Pott は「言語と発話 Sprechen の問題が前面に出る」⁹⁾として、この文学のシニフィアン実践 Signifikantenpraxis を研究してゆくことの重要性を理論づける。Pott はさらに、日常の意識と日常性の言語化をこの文学に現われた特質として究明しているが、基本に於て彼は『特性のない男』を《兄妹テーマー意識—文学》の相互に関連し合う領域において解こうとしてい

る。兄妹テーマというのは、主人公ウルリヒと彼の「神話的対偶者」でもあり、「第2の自我」alter egoでもある妹アガーテとの、神秘思想を下敷にした、主としてディスクールに支えられた情愛とその関係の意味づけの言語化の延々と続くプロセス（最終的には解決されなかった）部分である。

また、これに先だち1977年に Eisele は『特性のない男』の語り手自身のコメント、作中人物らの意識が、「文学」という概念、「文学」というものの存在様態をさまざまに問題とし反映した言説に依拠していることから、この小説を「文学小説」Literaturroman と名づけ、ここでの言表や事象が「文学的なものの全く特定の表象によって、フィルターをかけられて」いることを指摘する¹⁰⁾。事実、登場人物が大なり小なりモデルを持つのみでなく、引用が彼らの大いなる文体方式でもあるし、書くこと、書かれたもの、文学の中にあるが如くの生、などの表象が実際の生と等価的であるような表現は枚挙に暇がないほどである。このことから Eisele は主人公ウルリヒの存在様態が既にして文学であるのみならず、彼の目的 Telos が文学そのものであると結論づける。

彼はテキスト性という概念を持ちえていなかったために、作り物としての「文学小説」という面のみに着眠して、『特性のない男』の真の実質の欠如を批判することになったと言える。そして aZ テーマをもこの小説の核心 Quintessenz たりうるものではないと斥け、小説の最終段階として作者によって示唆されている「主人公ウルリヒの消滅＝戦争へ」が、内在する論理の当然の結末であったらうと、否定的で挑発的な発言で締めくくっている¹¹⁾。

ムジールが生涯をかけて幻視しようとした、現実世界とは別の、異った秩序である aZ とその神秘主義的な存在形式の可能性を、いとも簡単に「内容の無さ」を理由に否定し去る見解は Eisele 以前にも既に存しはした。信の構造にかかわることであるから周辺的にしか述べようのないことも確かである。だから、実質内容が何であるのか言いようのない aZ テーマを取り逃してはならない中心であるとする観点から論ずる Willemsen の、Eisele の「文学性」テーゼへの批判は真の批判たりえないことになる。しかも彼の論旨は様々なところから取って来た概念を殆んど咀嚼しないままやたら振り回すばかりで辿り難く、腹立たしいとしか言いようがない。どうか判断されるのは、彼がこの小説の中の文学と生との同一性（アイデンティティー）をもっと積極的に評価し、この小説の「真実概念の中心的機能である」と言わんとしていると見れることだ¹²⁾。それがどういう根拠によってかとなると、読み取るのを断念せざるをえない。ただ彼が、現実世界とは異った「別なる」、神秘的な領域にアナロジーな意味圏の顕現＝Epiphanie へ

の関心が当時の詩人たちを捉えた点を詳述しているのは、既に同様の指摘は早くから存したが、新鮮であった。ホーフマンスタール、リルケのほかに若きJ.ジョイスが挙げているのは興味深く、一つの作品の内部だけでは手懸りが乏しくても、文化史的アプローチはもっと可能かもしれないと思わせる。しかしともあれ最低限まで譲っても aZ テーマは、意味された内容 (=シニフィエ) に於てよりも意味しようとする機能 (=シニフィアン) として小説世界に作用を及ぼしていることは言うことができる。そして日常の通常世界からの超越としての「別なるもの」 das Andere をユートピア的に思考するのみでなく、何らかの超越性に繋がらなくとも、日常性にとっての das Andere が日常の中に書き込まれて、そこに磁場のような緊張関係が多くの場合隠蔽されて存していることを検討することを意味する。そのような das Andere をもつ aZ としてムジールは一方では愛や宗教や芸術を、他方では犯罪や狂気や性や戦争までの拡がりと考えていたふしがある。このようにしてこの小説を貫く一種の循環が浮び上って来ないだろうか？

3) 以上見たように、研究史は近年論者による態度決定の多少の差を示しつつも、この小説の特質として、言語性 (Sprachlichkeit)、テキスト性 (Textualität)、文学性 (Literarizität) を挙げて来ている。これらの概念は他の文学作品がそれぞれに持ち合わせていると考えられるよりもここではずっと大きな意味を持っていることに注目せねばならない。『特性のない男』には、①クラリッセ=テーマを中核にもつ自伝的部分、②「似たようなことが生じる」現実世界での、オーストリアの首府ウィーンの上流階級の間での愛国運動(「平行運動」PA。これもウヤマヤに終始するが)の部分、そして③主人公ウルリヒと妹アガーテの兄妹テーマの部分の三つの領域が、「物語の糸」に従ってではなく、平面的な「織り物」の如く語るという、既にそれだけでテキスト性が主となるような小説論を基盤にして、それぞれ殆んど独立的に存し且つそれぞれがストーリー性を一義的には持たず、互いに混在し合っており、そこには往々にして理解されるような、①と②の否定として③が telos として最終的に描かれるという程単純な動きに於いて存在するのではない。最終的に作者において未解決であり、描かれないままではあったが、第一次大戦の勃発という全く外的な——だが「戦争は [……] 内部から生じるものだ！」(MoE 1902)——作因によって以外には一応の収束も存し得なかったほど——結果的に——テーマの散乱した作品であって、そのような新しい読み方を求めると共に、そのような読み方とは何であるかを問いかけてくる。

この三つの領域に厳密な意味でかわる人物は主人公のウルリヒのみであ

り¹¹⁾、小説全体は彼の意識によって拓がってゆく趣きがあると共に、彼の想念の反映像でありもする。こうして全ての領域を経めぐるウルリヒの意識と言語とが互いにごく近くにあることによって生ずるテキストであること、更にまた、他の人物たちの発話 Sprechen の中に現われてくるテーマが、他の所ではウルリヒ自身のそれであったり、あるいは人物たちから語り手が受けついで展開することも多く、照応関係が様々に生じてくる。「愛」、「救済」、「天才」、「文学（の中の如き生存）」、「責任能力」等々。最も顕著な例はほとんど全ての登場人物が自分たちが思考を語りながら、Sprechen や言語そのものを問題化する態度を見せることだ。それは、思考の基盤である言語が破碎されている例に始まり、社会的コンヴェンションとしての言語から逸脱しあるいは排除された Sprechen の例、また、言語が偽りとして在ると同時にその正当化にも使われるケース、言語は現実を拘い取る格子網のようなものでグリットの間から滑り落ちてしまうことには役立たないといったこと、また、神秘的な無言語状況を描くのは言語であるという矛盾、等々いくつかのヴァリエーションとして現われる。言葉 Sprache ほど明瞭に表に出ているのではなく、しかも同じような機能をもつのが否定性 Negation であろう。

かくして直線性を失って、この小説全体は幾つかのテーマの回転する照応装置のようになってみえてくる。先に見た如く Pott は《兄妹関係——意識——文学》という解釈軸を提出したのだが¹⁴⁾、小論ではこの「兄妹関係」の根、地下にある（つまり生成史的に根の領域に押し込められてきた）クラリッセ＝テーマの部分を、この軸の原型として理解することから、この散乱的であるといえるテキストの基本性格を把握し、了解可能へと導こうという試みを述べるのである。

4) クラリッセ＝テーマを中心とする自伝的要素から成る部分の作品成立史の上での意味と、それが小説全体に対して有する意味論的また構造的作用（シンクロニー）との両方を考えることが小論の目的であるが、それを正当化してくれる何よりの根拠は、もう一人の「狂人」痴情殺人犯モースブルガーを描く、意味作用の重層ということで眼ざましい数章と並んで、この小説の中で最も垂直的深みをもって文章の渦を作り出しているということにある。表現史として考えるなら「現代文学の頂点の一つ」（C. Magris¹⁵⁾）という評価も強ち誇張ではない。このことはまたムジールの最も創造的である部分が『特性のない男』全体にとって、またムジール文学ひいては文学一般にとってどのような意味を持つかを考えるよう促すものでもある。Henninger は、連作短篇『合一』で現われているように、自らの

無意識に根差すシニフィアンの流れに乗るときにのみ、ムジールの真の創造性が発揮される¹⁶⁾、という風に狭く考えたが、そこでの自閉症的イメージ群に比べて、クラリッセ＝テーマの部分はそれを小説全体へと媒介してゆく要素によっていわば明るい。ということはそれが（aZ テーマの下位に置かれるべく、と考える人もいるが）イロニー化を蒙っているからだけではなく、小説の他の部分とのテキスト的呼応関係をもつことによって了解の幅が増し、読み手の中にあるテキストの動きに接続しうる可能性が高められる、ということだ。自閉する文章ではそういうことは生じない。

だが、「現代文学の頂点の一つ」という認識はあっても、また生成史的に核であったものだという事実は認めるようにしても、一定限度以上の役割をクラリッセ＝テーマ部分に与えるという視点はまだ明確には出て来ていないし、理論づけされていないと思ってよい。Heyd や Pott の論を押し進める観点が出てくるように予想される。小論はこの意味で少なくとも前回の拙稿をより一歩進めていることになる。そこではクラリッセを素描して「文章によって、テキストによってクラリッセの精神にわけ入ることの重大さの意識」がムジールその人を動かしていたことを述べたが、ここではもう少し詳細に見て小論の結論を補強することとする。

時代の内面的傾向を文学の主題としようと考えたムジールは、その傾向へのアンチテーゼとして超越的な価値——神秘思想に代表され、芸術の存在状態にアナロジーが求められるとされる——が現代の意識や心的状況に対してもつ意味を、多分に神話の設定をもった兄妹愛テーマによって描き出そうとし、他方では一切の価値体系が何らの保証ともならず、客観的にまた主観的に空無化しうる可能性を、狂気を内包した空転 *Leerlauf* にアナログに写しとろうとの作品意図を抱いた。

「クラリッセの中でごちゃごちゃになっているものは時代内容 *Zeitinhalt* だ。」(MoE 1377)

これは1930年の創作ノートに書きとめられた考えである。この意図があったればこそ、同年の小説第1巻の刊行の後、第2巻においてクラリッセを主要人物へとクローズアップする計画を持つと共に、他方でそれが aZ テーマを脅かすことを恐れて軌道修正を急務とせざるをえず、クラリッセ＝テーマを aZ テーマへの「アクティヴな対立物」と位置づけ、*Satire* あるいは *Ironie* の手法でもってインテグレートしていくという解決策をとった。

「?クラリッセの諸イデーを *satirisch* に扱う。そのようにしてのみ悲痛さ *das Traurige* がほのかに現われる。」(MoE 1378)

注意すべきは、時代内容を描かんがために「狂気」のクラリッセを利用したと

いうのではなく、逆なのだ。作者はまず狂気に見入る眼を持った。そしてそれを展開させていったその先に時代内容の混沌がその狂気を書き込まれていることに気付いたのだ。

ここで「狂気に見入る眼」と言うのは、ムジールの青年期の友人 Gustav Donath (=Gustl, 作中のヴァルターのモデル) の妻で、後年精神病院で治療を受けることになる Alice (Clarisse は一種のアナグラムになっている) への並々ならぬ複雑なかかわり方の中で芽生え、培われていったものだが、当時の彼の傲岸であると共に孤独に傷つき閉塞感に悩まされていた心的状況が惹き付けられるようにそれに向って行った。ムジールにおける「書く」という行為の、無意識にまで根差した欲求の源泉がここにはある。ここに集約されているファクターの重層性はかなり複雑で、それだけに彼にとっては解き難い惑乱であったと思われる。Alice は素質的に及び少女期の性的環境の故に性に対するアンビヴァレンツに強く書き込まれた過敏なパーソナリティーであり、父親との緊張関係が未解決なままに恋人 Gustl との愛に踏み切れぬものを持ち、その上一家の友人として出入りしていた L. Klages (実在の哲学者、主著『宇宙論的エロス』、マインガストのモデル) の思想的及び性愛的引力に乱されている。そこに三角関係的な緊張が生じていた。

若き日の R. ムジールが友人との交際の内に今はその妻となっている Alice のエロトマニャックな不思議な人格に牽引と反撥とを覚えただろうことは想像される。これと彼の Gustl の才能に対する劣位と優越とが混じた感情とが相乗して、ここでも色濃い三角関係状況があったと思われる。さらに、当時のムジール自身にもはかないながら流星のように存在の痕跡を残して数年の同棲ののちに若死にした Herma Dietz という恋人がいて、この体験が彼にとってほとんどトラウマとなって行ったのだが (= 短篇小说『トンカ』)、錯綜した日記や創作ノートを調べると Alice に Herma のイメージを重ね合わせていたことを窺わせる記述も見え、書き留められた或る夢の中では、Alice と考えられる女性が現われ、それは Herma の写し像でもあって、ムジールは「私は彼女を愛している」(TB107) と書いている。伝記的にも全く臆げにしか伝わってはず、どこまで現実でどこから小説的加工であるか区別は困難のようである。

加えて、ムジールの幼いころ家庭内に父親のほかに「家庭の友人」と呼ばれていた、母の愛人が生活を共にしていた奇異な三角関係を見て育ったことや、その母への彼ムジールのエディップスの固着関係などを考え合わせるならば——小説草稿にはまさにこれらの凝縮が試みられているが——、多層的な意味するもの[シ

ニフィアンス]の重なりから眼をそらすことができなかつたであろうことや、またそこから好きなだけの自己並びに他者についての原質のようなイメージを引き出したであろうことを考えると、ここには彼にとっての「精神現象学」の場があったと言える。つまり、自我や意識の理解のための基本構図を暗示してくれるものである。

このようにして、自己の体験に根差したもの、恐らく Gustl や Alice から直接聞き知ったこと、あるいは小説的想像を發揮して展開していったものなどを混ぜ合わせた、凝縮度の高いイメージを含んだ創作のためのノートが、日記のあちらこちらに散在しているが、それらは幾つかの段階を経てやがて小説へと変容されていった。

5) 小説の完成部分からだけでなく、未完成部分にある自伝的要素とりわけクラリッセ＝テーマの部分、その全てを網羅しないまでも然るべく取り入れて再構成し、そこに成立するより広いクラリッセ＝テーマを根拠にして、(最終的には)論理的 telos を欠くこの小説の読み解きの新たな方式にしようというのが、小論の目論見であった。それはテーマを通じてではなく、テキスト性の概念によってなされる。

「クラリッセの中でごちゃごちゃになっているのは時代内容だ」という先に引用した文の「時代内容」を「小説内容」Romaninhalte で置き換えてみると、クラリッセ——時代、クラリッセ——小説というパラレルが得られるのであるが(「クラッセの中でごちゃごちゃになっているのは小説内容だ」)、そのような照応関係の組成を考えてみなくてはならない。その前に完成部分と未完成部分でのクラリッセ＝テーマの章を見ておこう。

まず、完成部分(作者の生前に刊行された第2巻の38章まで)にクラリッセが登場する場面は次のとおりである。()内の人物名は直接登場せず言及されているのみであることを示す。

第1巻 I 「一種の序文」、II 「同じようなことが起こる」

14章「若き日の友人たち」 ウルリヒ (32才)、ヴァルター (35才)、クラリッセ (25才)

17章「特性のない男の、特性のある男への作用」 クラリッセ、ヴァルター (ウルリヒ)

38章「クラリッセと彼女のデーモンたち」 ヴァルター、クラリッセ (モースブルガー、ウルリヒ)

54章「ウルリヒがヴァルターとクラリッセとの会話の中で反動的態度を示す」ウルリヒ、ヴァルター、クラリッセ (モースブルガー、アルンハイム)

56章「平行運動の諸委員会の活発な作業。クラリッセが閣下の手紙を書いてニーチェ年を提

- 案する」 ウルリヒ、ラインスドルフ（閣下）（クラリッセ）
- 70章 「クラリッセが或る話を物語るためにウルリヒを訪問する」 クラリッセ、ウルリヒ（クラリッセの父、マインガスト、ルーシー）
- 82章 「クラリッセ、ウルリヒ年を要求する」 クラリッセ、ウルリヒ（ラインスドルフ、ヴァルター、モースブルガー）
- 83章 「同じようなことが起こる、あるいは何故ひとは歴史を発明しないのか？」 ウルリヒ（クラリッセ）
- 84章 「普通の生活もユートピア的性質をもつという主張」 ウルリヒ、クラリッセ、ヴァルター
- 97章 「クラリッセの神秘的な力と使命」 クラリッセ（ヴァルター、ウルリヒ、モースブルガー、マインガスト、クラリッセの父、妹マリオン）
- 118章 「それなら彼を殺して！」 ヴァルター、クラリッセ（ウルリヒ）
- 123章 「転回」 ウルリヒ、クラリッセ（ヴァルター、モースブルガー、他）
- 第2巻 Ⅲ 「千年王国の中へ（犯罪者たち）」
- 7章 「クラリッセからの手紙が届く」 ウルリヒ、ヴァルター、モースブルガー、兄のジークフリート、フリーデンタール医師）
- 14章 「ヴァルターとクラリッセのもとのニュース。露出狂とその見物者たち」 ウルリヒ、ヴァルター、クラリッセ、マインガスト、露出狂、通行人
- 19章 「モースブルガに向かって前進！」 ヴァルター、クラリッセ、マインガスト、ウルリヒ、ジークムント（モースブルガー、フリーデンタール博士、クラリッセの両親）
- 26章 「菜園の春」 クラリッセ、マインガスト、ヴァルター、ジークムント（ウルリヒ、モースブルガー）
- 32章 「将軍がその間にウルリヒとクラリッセを精神病院へ連れてゆく」 ウルリヒ、シュトゥム将軍、クラリッセ（ジークムント、マインガスト、モースブルガー、アガーテ、ディオティーマ、ヴァルターそのほか）
- 33章 「狂人たちがクラリッセに挨拶する」 クラリッセ、ウルリヒ、シュトゥム将軍、ジークムント、フリーデンタール、患者たち（ヴァルターほか）

作者の生前に清書にまで纏められていた未完成部分。これには次のものがある。

「早朝の散歩」i クラリッセ（ヴァルター、マインガスト、モースブルガー、フリーデンタール博士）

たとえば、「そこここで鳥の声が哀れな魂のように叫び声をあげた。〔…〕彼女は微笑の帯を巻きつけた恰好で、まるで罪〔新月〕に絡まれた地上の聖母のように立っていた。」(MoE 1286) 《鳥》、《罪》、《新月》、《聖母》は彼女にとって特別のシーニュである。

「早朝の散歩」ii クラリッセ、シュトゥム（ウルリヒ、モースブルガー）

たとえば、「彼女は将軍に重躁症発作のまねを演じてみせた。片腕を直角に曲げ硬直させて身体にぴったりくっつけ、頭を前方に突き出し、上体でもって規則的な順序で水平に前方へ向けて円を描く痙攣的な動作を実演した(…)。」(MoE 1292) この身体表現は同時代の画家エゴン・シーレの絵を思わせる。

「ヴァルターとクラリッセの葉環で飾られた休戦」 ヴァルター、クラリッセ（マインガスト）たとえば、「人類は、総合体（ジンテーゼ）を新しい、より高い健康へ完成してゆくた

めには、時々精神病になる必要がある」とクラリッセは言う。ニーチェの思想の亜流である彼女の狂った幻視であるが、現実にはこのヴィジョンは「戦争」という形で実現してしまう。

初期草稿の中の重要なテーマは次のものに纏められる。

ヴァルターとクラリッセの確執、不貞問題、クラリッセのヴァルネラビリティーへの Klages (=マインガストのモデル) やウルリヒの支配力。

モースブルガー脱獄幫助の計画、医師らとトランプをしているモースブルガーに会う。

「健康の島」に逃れて来たクラリッセとウルリヒの交歓。

クラリッセの発病(ローマへの旅、「ギリシア人」、半陰陽のモチーフ、救済者妄想) この部分は Alice Donath に関わる聞き書きが基となっている。従ってここでは症例研究を思わせる直接性が文体を性格づけ、小説になった部分の媒介されて ironisch な要素が織り込まれた文体とは異っている。

6) 以上のようにクラリッセに関わす章を草稿段階のものまで範囲を広げて列挙してみた。たしかに、クラリッセ・テーマを『特性のない男』を読み解く上での鍵——テキスト性、テキストによる小説——と考えていこうとする小論の論旨を支えるには比率的に少ない。しかも完成部分と未刊行の及び草稿の部分とを比べて明らかにわかる違いは、前者に於てはウルリヒの——従って語り手の——クラリッセに対する態度が批判者的、傍観者的になっていることも、このテーマが傍流であり下位であるという印象を強める。

このテーマが傍系になって小さくなったことのもう一つの原因は、モースブルガー・テーマからのウルリヒ (=語り手) の離脱にあった。最初期の小説構想は「悪」の体現者としての主人公の設定から始まっており、そこでは主人公は絞首刑に処された少女殺し犯のドッペルゲンガーである。その後幾つかの発展段階があるが、ウルリヒのすぐの前身のアンデルスは痴情殺人者モースブルガーに強い関心を抱くと共に、クラリッセに使喚されて彼を脱獄させる試みまで行なう。Kaiser/Wilkins はこの脱獄幫助事件も実際に為されたのではなく、アンデルスの想念を投影したようなものだという解釈を出して、この事件のもつ意義をもっと小さくしようとしている¹⁷⁾。完成段階の小説ではウルリヒは一方では今なお合理的に説明しえないままに深い関心と或る種の近親性を抱いているが、次第にこの殺人者に関わることによって自分の内面や社会の通念体系に変化を起こしようという考えから撤退して、それをクラリッセの妄念世界内の勝手な肥大に委ねる態度へと移る。彼には aZ テーマがそれに代わるプラスの方向をもつと思われる試みとして重大となってくる。

それによってモースブルガー・テーマは地下的領域に押しやられたとのみ解すべきではない。語りそのものはウルリヒより広いのだ。なるほどウルリヒの関心圏を離れはするが、それによって語りとの関係に入って、いわば独立する。「モースブルガーが考える」や「モースブルガー踊る」などの章は単なるエピソードであるに留まらず、小説の中に主人公ウルリヒとは異った、別の意識、現実を言語的に別様に映し出す鏡が備わることになる。この事の深刻さはクラリッセ・テーマがそうであるのと同じであると言える。

クラリッセ・テーマはウルリヒ個人のそのような変化の視点からのみ見てよいものではなくなる。むしろこのテーマに関連する小説部分に含まれる諸問題——時代、人生、他者、男女、芸術や知（思想）との関わり、狂気、言語、そして小説及び小説を書くこと——は、未解決で不確定な言説のままウルリヒの中を、そして小説の中を駆けめぐるのであり、それらを担う文体に於ても独特のイメージを支える、比喩や共感覚表現、心的言語と身体的言語の混淆や否定語法、また他方では Satire や Ironie の超越的文体などさまざまな手法が生み出されてくる源泉であると言える。

それを目して、先に紹介したように、「現代文学の一つの頂点」とする C. Magris の評価も首肯できる。彼は特に記号言語 (Zeichensprache, シーニュ) に領されているクラリッセの心の有りようと、それらのシーニュが通常の了解構造をとっくに外れて、特定の意味をもたずただ無限のアナロジーの場 (Feld) へと入り込む様とを特徴づけている¹⁸⁾。心的なものと言語との結びつきの最も根底的なところに発するイメージが生み出され描き出されると同時に、ここはそれの破碎の一つのモデルケースでもあるという、いわば眩暈を覚えるような意味的及びシンタクスの迷路が現出する。

7) このような箇所を「読みたい」とする読者の側の欲望は、そのまま書いている作者の「書きたい」欲望に対応している。それは好奇心からするものであれば一過的なそして何ら主体に及んでこないよそごとであろうが、作者自らがこのような迷路を設定し踏み込んでゆくのは——それは読者も同じことだが——自我の認識、意識の確認の作業とアナロジーであるということに主たる理由があると考えられよう。

興味深いのはクラリッセの Zeichensprache に対するウルリヒの態度が、完成部分と未完成部とでは、先述したことから予測できるように、はっきり異なることである。前者では彼はかなり多くの場合理解を示さず冷淡であるが (例えば

MoE 217), 後者では「彼女の発明したこの言葉を彼は徐々に理解した」とか「クラリッセの創り出した思考経路を彼はほとんど理解するようになった」(MoE 1740f) というように、ウルリヒは狂気に近づいたクラリッセに近親感をもち、同質性を感じとる。(この理解方式は「第二の自我」アガーテに向けられることになる)

完成部分に於てはクラリッセの奇異な思考は、ウルリヒによってではなく、語り手によって「理解」されることになる。つまり少くとも語り手は自らの表現欲求に乗り、自らの表現力の及ぶ限りどこまでも追隨していることになる。語り手は「理解」し、ここに潜む破碎の現象をも小説全体が抱えこむそれと照応させる働きを演じる。このことは、小説全体が aZ テーマを含めて、「別なるもの」(das Andere) を求めようとしているのと軌を一にする。das Andere とは破碎のシノニムである。これは近年ディコンストラクションという名称で論理の枠組を根底において懐疑する考え方に相通するものと思えるのだが、その源流にニーチェがいることがここで考え合わされる。

というのは、クラリッセは特に超人思想、文明否定、そして病氣(“狂気は恩寵だ”(MoE 910)の観念などにおいて、ウルリヒも抱いているニーチェ主義に多分に歪曲的に固執している人物であるということが加わるからである。1911年12月13日付けの日記にムジールはクラリッヒのモデルである Alice Donath の思考方法とニーチェの“Ecce Homo”でのそれとの一部の類似性に単なる戯画以上のものを認めて注目している。

「思考の発端部は至るところで同類だ、しかも身体的条件に根差すその出自の点でも。」(TB 1 251)

この観察から出発して、ニーチェの言葉をオウムのように口にするだけではなく、奇異なありようでいわばそれを「生きる」クラリッセが描かれる。そして彼女のズラした発言(批評語)の妙な正当さにウルリヒが気づかされもするという場面が幾つかあることにもなる。

ウルリヒのクラリッセに対する繋りの最も深い部分は次のように言い表わされる。

「彼はクラリッセを害した。[……] 不埒にもクラリッセの内にある災禍の洞を、乏しい所、病んだ所、不幸にも天才的などころを [……] 一層悪化させた。」(MoE 63)

これと殆んど同じ言い回しが147ページにも繰返されていることを指摘せねばならないが(そこでは「不埒にも」の代わりに brutal という語が使われている)、それが彼女の特に性的基盤でのヴァルネラビリティーを指すのか、思想的(ニー

チェ) 影響を言うのか、更には両方においての裏切りを言うのか定かでないけれども、ここにはムジールにおける人間関係了解の1つの基本型が出て来ている。多かれ少なかれ通常の意味での社会関係の層より一步踏み込んで、その下の層での言語化し難い心的状態にかかわる了解であって、読んだ場合類比的にも必ずしも一義的には判断し難いが、凡その領域としては有り得ることを認めてよいであろう。これはクラリッセの狂気にウルリヒが何らかの意味での責任があることを暗示してもいるのだろうが、同時にウルリヒにも同じ水平の心的状況が存在することを示唆し、それが先に述べた時代内容 (Zeitinhalt) へと繋っていく質のものである。

クラリッセの行動や思考を表現する言語は、彼女の狂の部分を描くという働きと、それが小説内でただ狂った言語として別次元的に存在するのではなく、自らの言説としての有り方によって小説内存在となり、引いては時代内容を映し出す鏡面であるということと、その2重の位相を同時に満足する手法を有していると言える。しかも表現し難いものをも表現するというのは、一方では Ironie を前提する意味化行為であり、他方では語り手自身がそのような表現場に自ら入り込むことによって表現の流れの中に立つことになる。だからクラリッセと語り手との重なりというもう一つの重層構造も組まれていることになる。

ここには「意味されるもの」(シニフィエ) よりも「意味するもの」(シニフィアン) の優位、Pott が言う「シニフィアン連鎖への主体の固執」¹⁹⁾ということが、とりわけシーニュ (Zeichen) の支配をうけているクラリッセに顕著に現われるにしても、そのような言語表現現象が語り手つまり作者にとっては、そして作品全体にとってはどういうことなのかを理論化して行く必要があると思われる。Pott は主人公ウルリヒにおいて《馬》や《手紙》の持つシニフィアンの作用を指摘しているが、この点でもクラリッセ——ウルリヒ (=語り手) という同質性においてテキストの動きを理解できるのではあるまいか。

8) クラリッセの独特な思考方式、思考内容はどのようなであろうか。

「彼女は自分の考えを苦勞して組み立てる必要はなかった。考えの方から丁度町々の輪郭のように彼女の方へやってくるのだった。[……] [その結果] クラリッセの考えは彼女の傍らを並んで駆けているようであり、そこで彼女の体との嵐のような競争が始まるのだった。」
(MoE 1708)

これは狂的な思考のイメージであろう。だが、論理に拠らない直観的な詩的言語との共通性も考え合わせられる。

クラリッセは自分は二重存在 (Doppelwesen) であると言う。彼女の意味するのは、女であって男でもあるという特別な二重性であって、彼女の性愛の混乱の原因でもあり結果でもあるコンプレックスだが、男と女という二様の人間存在の或る超え難さの苦悩の裏返し表現でもある。そして彼女のこの考えは他方では、ウルリヒと妹アガーテの神話的一神秘的愛 (Androgyn) のパロディーあるいは否定的現われと解されることが多いのだが、しかしこの両者には (テクスト的に) 通底するものがあると言わねばならない。さらに、内と外という二重性も含まれる。通常人は内と外とにまたがるアイデンティティーを最終的には社会的コンヴェンションによって保つが、クラリッセはそれが保てない分だけかえって二重存在であるという自己規定により架空のアイデンティティーの中へ入りこむ。

この「二重存在」は彼女において独特の「二重言語」(doppelte Sprache) として現われてくることがある。その二重になった言語は、通常人が心理的に社会的に操作する両義性に似ていて、それよりも原初的で孤立的である分だけに深刻であり、場合によっては通常言語使用への批判という性格をもつ。詩人にとっての論理によらぬ直観的イメージの場となりうる、言語と対象との結び付きが解けている状態に類似してくる。

クラリッセにおいてこの二重性は「罪の形」Sündengestalt と「光の形」Lichtgestalt と名づけられる。前者から後者への「救済」という観念が彼女の場合生活感情からばかりでなく、ニーチェ思想からもやって来た強いオブセッションであるが、この「救済」の観念はまた、逆説的にやがて戦争を胚胎してしまう「平和的」な平行運動に携わる人々の念頭にも去来しているというテクストの繋りがある。

クラリッセは庭で虫を食べている黒ツグミ (Amsel) を見る。

「その黒ツグミは暴力を行使する瞬間には罪の形であった。[……] ツグミが燃えるような赤橙色の嘴によって虫の罪を摂取していると見てとれた。ツグミは「黒い天才」ではなかったか、鳩が「白い精神」であるように？ 徴表 (Zeichen, シーニュ) というものは連鎖をなしてはしないだろうか？ ああ露出狂男は大工 (=モースブルガー) や、師の逃亡と。

[……] クラリッセが真に感じたことは内部の出来事と外部の出来事との言い表わし難い一致だった。」(MoE 926)

ここで露出狂というのは、第2巻14章で、ウルリヒ、クラリッセ、ヴァルター、師のマインガスト、兄のジークフリートらが偶々二階の窓から見下していた時、まさに行為に移らんとして街路樹の蔭で不審な挙動をとる男の話であって、『特性の男』の中でも極めて特異な一章で驚かされる。我々には作者がこれに近いシチュエーションの見物者の体験を持っただろうと推測せざるを得ない。

クラリッセは自分の引き寄せる力によってこの男が自分の家の窓下にやって来たのだと信じるし、その同じ力で殺人犯モースブルガーの救出行動に繋っていると妄想する。ここで彼女の使う「引き寄せる」という語 *anziehen* はまた「服を着る」の意味を併わせ持ち、彼女に於いて、幼い頃の「男の子のように」「素早く」服を着ることが出来たことと二重言語になる。この二重性は言葉遊びではなく、傷ましいまでに彼女によって信じられている。しかも信じうべき内容は無く外から見ると徴表の、シニフィアンの連鎖が主に動いてゆく。しかも「黒ツグミ」がこのテキストを離れて作者ムジール自身における一つの *Zeichen* 性格を有していることもここに共鳴してくる。意味作用の重層である。ムジールは *Die Amsel* という短篇小説を書いている。

上記の引用箇所はクラリッセを取り巻く人的関係や彼女の狂的精神状態の進行や言語表現そのものの重なりなど凝縮された一節であったが、中でも「*Zeichen* というものは連鎖をなしていないだろうか？」という一文が注目される。ここに加えて *Magris* にならって「人間の実際の状態とは一切が *Zeichen* (シーニュ) である状態なのだ。」(MoE 928) を考え合わせるとよい。この一句は才能の涸渇に脅えるヴァルターがいつか病む妻クラリッセの幻想圏に入りこんで表明する言葉である。そのクラリッセは鼠蹊部に大きなホクロ (*Muttermal*) をもっている。彼女は自分が男を支配する力をそこに書き込まれていると解している。*Mutter* とは「聖母マリア」を意味するものでなければならず、従って彼女は「救済者」を生む定めであり、それは夫ヴァルターによってではなく、「悪」を秘めたウルリヒによってである、という連鎖ができあがる。しかもこのホクロは思春期の、父親との近親相姦的緊張という実際起りもし、また無意識にまで達するトラウマとして残ってもいる意味作用を下層に湛えている。

「私は記号を書き込まれている。Ich bin gezeichnet.」(MoE 1710)

「健康の島」というテーマをめぐる1920年代の類しい量の草稿がある。この「島」という隔絶していわば密閉している空間でアンデルス(ウルリヒの前身)はクラリッセからの *Zeichen* を無数に受け取り了解する。ニーチュェゆかりのローマへの一人旅の途中病いを発したクラリッセはこの島に辿りつき、アンデルスを電報で呼び寄せる。アンデルスの方も妹アガーテとの愛の試みに失敗している。これは小説内の状況ではあるが、作者ムジールの実体験を推測させる。

病んだクラリッセの心は物々との至福の神秘的な交感の中に入る。

「彼女と物々との間には絶え間ない *zeichen* の交換と了解が、共謀が、コレスポンドンスの高揚が、燃えんばかりに活々した生命の現象があった。」(MoE 1747)

彼女は石や砂や小枝の様々な形、色、位置によってそれをアンデルス（ウルリヒ）に伝達し、彼の方も理性以外の感覚を解放して、この彼女の発明した独特の思考方法を殆んど了解する。これは aZ テーマの核にある神秘的体験に殆んど同質的であるといえる。

彼女の思考方法やシーニュの連鎖を表現してゆくには「言語を貧弱化している」通常のシンタックスを打ち破らなければならない、とクラリッセは考える。そこで彼女の認識は「真実と取る」wahr-nehmen ではなく、「真実を孕む」fruchtbar-nehmen となる。次のような言葉遊び（彼女の言う「言葉の化学」）が示される。

Gott と rot と fährt から, Gott fährt rot, あるいは, Gott, rot, fährt, さらに Gott!!! rot !!! fährt!!! が生まれる。(MoE 1753)

別のページでは Gott fährt grün が次のようになっていく。

Gott! grün!! fährt!!! Gott. grün.. fährt... Gott... Gott, grün fährt Gott! あるいは
Gott fährt grün, Gott grün. Gott fährt grün grün.
Gott grün fährt Gott grün.
Gott grün fährt grün Gott. (MoE 1796)

推測するしかないが、恐らく Wortspiele の多くは作者が友人の妻 Alice から聴き取ったものではなかろうか。そして詩人の創造行為との共通点を感じたことだろう。だとすると1900年代のことで、1914年からのダダイズムを先取りしていることになる。

「そしてクラリッセの数年後に事実これに類した言葉の遊びが健康な人々の何かを予知する流行となった。」(MoE 1753)

語り手は既成の文体をクラリッセに押しつけているのではない。しばしば彼女と一体となって文章の領域を作り出している。

9) 「兄妹愛テーマ——意識——文学」(Pott) の下部に「クラリッセ・テーマ——意識——文学 (あるいは言語, シーニュ)」を設定して、ここに『特定の無い男』のテキストの生じてくる源が存することを考察して来た。それは「テキストの自己コメンタール」という Heyd のテーゼを一步おし進めうるものと思われる。その可能性は、クラリッセ・テーマが他の2つ、「同じようなことが起こる」現実世界と「aZ」とを、生成史的にもまた論理関係的にもいわば内包するものであって、且つ作品的にはそれらに対して下部的である、という構造であることと大いに関係してくる。

テキストとは何か、の厳密な定義は論者の手にあまることだが、一般に考えられている、「織物」、Texturの性格をもつ文、というイメージに間に合う。殆んど一方的であり、語が指示性の水平で動く推理小説の文は「織物」を作らず、従ってここでいうテキスト性を全くと言える程持たない。文学作品の多くのもこの性質を持ってはいないだろう。語り手の意識、あるいは作品に内在する中枢的意識と言語との関連の深さと言えるかもしれない。ともかくも、『特性のない男』においては、語り手の意識を担う語やイメージや表現や文あるいはシーニュが作品のさまざまな所、さまざまなコンテキストで結晶の切子面のように少しずつ異なりながら互いに関連をもち照応し合っている特徴を言うことができる。

そしてそれは自伝的要素からなるクラリッセ・テーマが本来的に、つまりムジール文学の原点として有していた作用なのである。そのストーリー的内容、テーマ的内容よりもテキスト性がより重要である。

クラリッセ・テーマを『特性のない男』読み解きの鍵にしようという提案は、ロラン・バルトの次のような読書に似てくる。

「ブルーストをもとにして、(フローベールの)ノルマンディーの花盛りのりんごを読む。私は常套句の支配、起源の逆転、先に書かれたテキストを後に書かれたテキストから由来させて読む気楽さを味わう。ブルーストの作品は、少くとも私にとっては参考書であり、全体のマテジスであり[……]、循環する記憶である。」²⁰⁾

注

Robert Musil の作品 (引用は()内の記号とページ数で表わす)

Gesammelte Werke. Hrsg.von A.Frisé

Bd. 1. Der Mann ohne Eigenschaften. Hamburg 1978. (MoE)

Bd. 2. Prosa und Stücke. Hamburg 1978 (PS)

Tagebücher. Hrsg.von A.Frisé, Hamburg 1976. (Tagebücher=TB 1, Anmerkungen=TB 2)

参考文献

(本文中に引用したもののみを挙げる。引用は以下に著者名とページ数であらわす)

Arntzen, H.: Satirischer Stil. Zur Satire R. M.'s im Mann ohne Eigenschaften. Bonn 1970 (1960¹⁾)

Ders.: Musil-Kommentar zu dem Roman Der Mann ohne Eigenschaften. München 1982

Eisele, U.: Ulrichs Mutter ist doch ein Tintenfaß. Zur Literaturproblematik in Musils Mann ohne Eigenschaften. In: R. M. Wege der Forschung. Hrsg. v. R. v. Heydebrand. Darmstadt 1982. S. 160-203

Hefrich, E.: Musil—Eine Einführung. München & Zürich 1986

- Henninger, P.: Der Buchstabe und der Geist. Frankfurt/M. 1980
- Heyd, Dieter: Musil-Lektüre---der Text, das Unbewußte. Frankf.a. M. 1980
- Kaiser, E./Wilkins, E.: Robert Musil. Eine Einleitung in das Werk. Stuttgart 1962
- Dies.: Monstrum in Animo. In: DVjs 37 (1963) , S. 78-119
- Magris, C.: Musil und die Nähte der Zeichen. In: Philologie und Kritik. (MS- 7) Hrgs. von W. Freese. München 1981. S. 177-194
- Michel, K. M.: Die Utopie der Sprache . In: Akzente 1 ,1954,S. 23-35
- Pott, H.-G.: Robert Musil, UTB 1287, München 1984
- Willemsen, R.: Das Existenzrecht der Dichtung. Zur Rekonstruktion einer systematischen Literaturtheorie im Werk R. Musils. München 1984
- ロラン・バルト：テキストの快楽（沢崎浩平訳）みみず書房 1978

- 1) この表題は D.Heyd の論文から借用した。小論の筆者が模索していた考えを見事に言い表す語である。以前は気付かずにいたが、小論を書いている途中で行き合ったので借用を思い立った。→Vgl. 4)
- 2) 拙稿「R.ムジール『特性のない男』の読み方の「転換」」、西田先生退官記念「ドイツ文学・語学論集」1985.S.147-155
- 3) Willemsen, S.277f.
- 4) Heyd,S.136
- 5) Kaiser/Wilkins, 1962
- 6) → 1)
- 7) Michel, S.28
- 8) Arntzen 1982,S.82
- 9) Pott, S.142
- 10) Eisele, S.161
- 11) Eisele, S.193f.
- 12) Willemsen, S.256 u. 284
- 13) もう一人シユトム将軍が素朴な懐疑派として3つの領域に関わる人物である。彼をアルンツェンは「無意識の解説者」と呼んでいる。→Arntzen 1970, S.158
- 14) Pott, S.
- 15) Magris, S. 191
- 16) Henninger, S.166
- 17) Kaiser/Wilkins 1963, S.92f.
- 18) Magris, S.191
- 19) Pott, S.116
- 20) バルト, 68ページ